

○志太榛原地域では、イチゴの新規就農者や複合作物として新たにイチゴ栽培に参入する者が増加しているが、経営は不安定である。
○経営安定のためイチゴ基礎講座、スマートイチゴ研究会を開催し、イチゴの生理生態特性、防除、栽培管理などの知識習得及び栽培技術向上を支援。
○この結果、複合環境制御装置、日射比例給液装置、UVBの導入が進むとともに、イチゴ栽培開始3年以内の3戸が10a当り6tの目標収量を達成した。

具体的な成果

- 1 新規参入者の育成及び確保
 - イチゴ基礎講座の受講者数
令和3年 延べ159人
令和4年 延べ167人
 - 新規研修受入農家
令和3年0戸 → 令和4年 イチゴ3戸
- 2 スマート農業技術の導入促進
 - 複合環境制御装置
令和3年 2戸35a
令和4年 3戸45a
 - 単収の増加
目標収量6t/10a達成農家
令和2年0戸 → 令和4年3戸

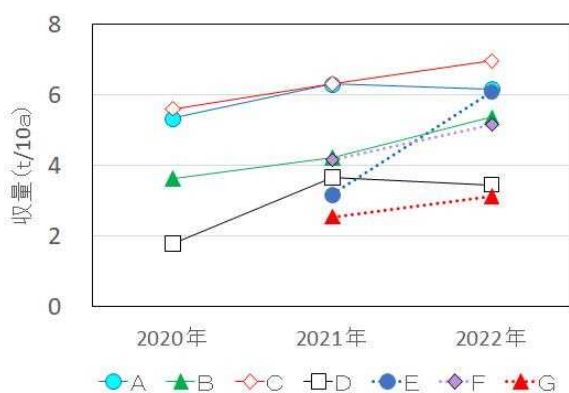


図1 基礎講座受講生の終了の推移

- 3 環境に配慮した生産方式の導入推進
 - UVBの導入
令和3年 2戸32a
令和4年 3戸40a
 - 日射比例給液装置
令和3年 3戸76a
令和4年 7戸100a

普及指導員の活動

令和4年～継続

- イチゴ基礎講座を12回開催した。



- スマートイチゴ研究会を6回開催し、先端技術の情報共有を行った。
- 県単事業を活用し複合環境制御装置の導入を推進した。

- 国交付金を活用し、天敵蜂とUVBの現地実証を行った。

- エコベリー研究会を4回開催し、日射比例給液による施肥量を低減する管理方法の習得を図った。

普及指導員だからできたこと

- ・イチゴの専門技術とスマート農業技術を組み合わせた省力安定生産技術の現地実証を行った。

- ・地域の課題を解決するためにJA、市と連携しながら補助事業を活用し、UVBの導入を推進した。

次世代を担う経営体育成と先端技術を活用した施設園芸の生産性向上

活動期間：令和4年度～（継続中）

1. 取組の背景

静岡県志太榛原地域は温暖な気象と日照時間に恵まれたイチゴ産地である。生産者の高齢化、担い手不足により栽培面積が減少する中、大井川地域では異業種からの研修生を受け入れる、県の「がんばる新農業人支援事業」により同地域では新規就農者が毎年2～3人定着している。また、ハイナン地域では複合作物として新たにイチゴ栽培に参入する者が増えている。

産地を維持するためには、イチゴ新規就農及び参入者の経営安定と省力化技術の導入が必要である。そのため、栽培管理技術習得のための基礎講座、研究会を開催し、スマート農業の導入による栽培管理の自動化を推進した。

表1 管内イチゴの生産状況（大井川農協、ハイナン農協）

年度	農家戸数（戸）		栽培面積（ha）	販売金額（億円）	1戸当り販売金額（万円）
	うち新規就農	うち新規参入			
平成28年	68	2	11.4	5.9	868
平成29年	70	2	11.6	6.6	943
平成30年	69	3	11.5	6.7	971
令和元年	63	3	10.7	6.2	984
令和2年	65	3	11.3	7.0	1,077

2. 活動内容（詳細）

（1）新規参入者の育成及び確保

①イチゴ基礎講座

J Aと連携し、イチゴ基礎講座を年間12回開催し、就農3年以内に目標収量高設栽培6t/10a、土耕栽培5t/10aを達成するため、イチゴの生理生態、病虫害防除、栽培管理などの基礎知識習得を支援した。

②新規研修受入れ農家の確保

J Aと連携し、研修受入れ農家の掘り起こしを行い、新規就農希望者のイチゴの作業体験を行った。

（2）スマート農業技術の導入促進

イチゴ基礎講座受講後、複合環境制御装置を導入し、県育成の新品種‘きらび香’栽培を開始した生産者を対象に、スマートイチゴ研究会を年間6回開催した。

（3）環境に配慮した生産方式の導入推進

①UVB

みどりの食料システム戦略緊急対策交付金 グリーンな栽培体系への転換サポート（令和4年）を活用し、J A、市と連携して、UVBと天敵蜂の

現地実証を行った。

②日射比例給液装置の導入

タイマー給液方式と日射比例給液方式の現地調査を行った。

3. 具体的な成果（詳細）

(1) 新規参入者の育成及び確保

①イチゴ基礎講座

令和4年は、延べ167人が受講した。

②新規研修受入農家

榛南地域受入連絡会において、新たにイチゴ農家2戸が、新規就農者育成総合対策の研修機関として認定され、令和5年度から研修生の公募を行う。大井川地域受入れ連絡会において、新たにイチゴ農家1戸が、研修機関として認定された。

(2) スマート農業技術の導入促進

①令和4年は、3戸45aに複合環境制御装置「ふくごう君Ⅱ」が導入され、携帯端末による室内環境要因のモニタリングと遠隔操作が可能となり、ハウス管理の省力化が図られた。

②単収の増加

目標収量6t/10a達成農家は、令和4年は3戸となった。

表2 イチゴ基礎講座受講生の栽培概要

経営体	イチゴ基礎講座	栽培方法	複合環境制御装置	日射比例給液装置	天敵	UVB
A	1期生	高設	○	○	○	○
B	1期生	高設	○	○	○	
C	1期生	高設	○	○	○	○
D	1期生	土耕無加温			○	
E	2期生	高設	○	○	○	○
F	2期生	高設	○	○	○	○
G	2期生	高設	○	○	○	

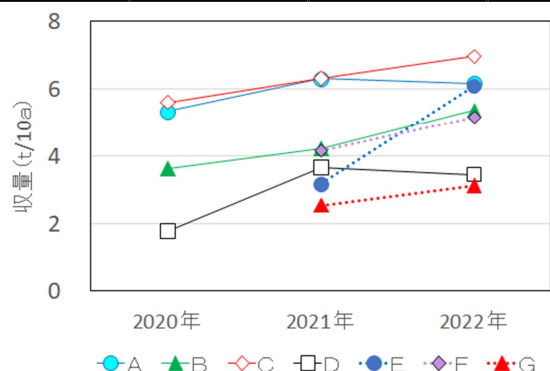


図1 基礎講座受講生の収量の推移

(3) 環境に配慮した生産方式の導入推進

① UVBの導入

UVBがあるハウスは、ないハウスに比べ、殺菌剤の散布回数が2分の1以下に低減され、うどんこ病の発生が抑制された。

表3 現地農家の栽培概要

生産者	UVB	うどんこ病
A	なし	11月22日発生
B	なし	12月12日発生
C	あり	発生なし
D	あり	発生なし

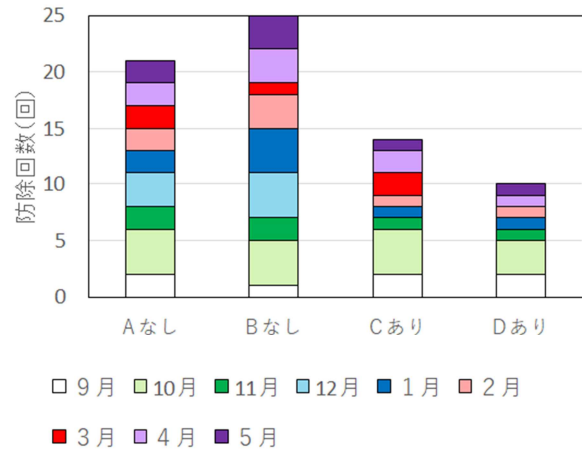


図2 うどんこ病防除回数の比較

② 日射比例給液装置の導入

令和5年度までに12戸、200aに日射比例給液装置が導入され、施肥量低減が図られた。

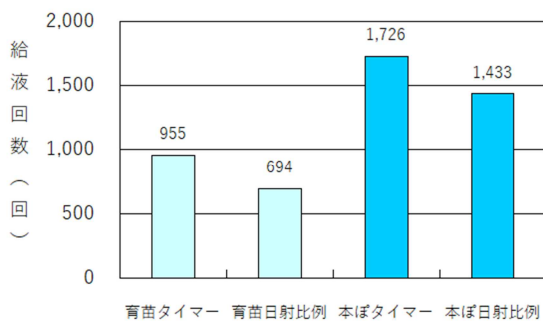


図3 給液回数の比較

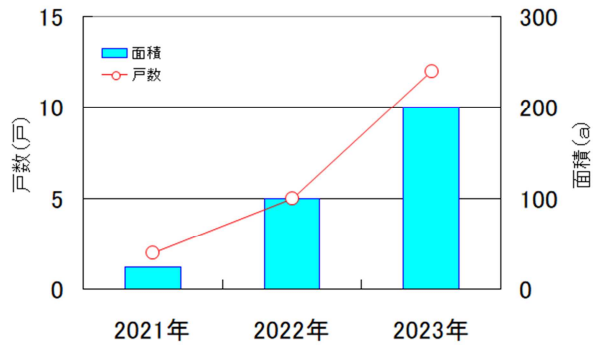


図4 日射比例給液の導入状況

4. 農家等からの評価・コメント (藤枝市北川氏)

本ばにUVBを活用することにより、うどんこ病の防除回数が大幅に減り、省力化された。また、収穫するイチゴの果形が、でこぼこせず、きれいな実になった。今後は、育苗ハウスへのUVB導入を検討したい。

5. 普及指導員のコメント (志太榛原農林事務所生産振興課班長 藤浪裕幸)

現地調査の結果、複合環境制御装置によるハウス管理の省力化、UVBによる防除の省力化、日射比例給液装置によるコスト低減が明らかになった。

今後、イチゴ基礎講座受講生を対象に、これらの導入推進を図り、経営を安定化させる必要がある。

6. 現状・今後の展開等

新規就農者及び新規参入者の経営安定と規模拡大によりイチゴ産地の維持、発展を図る。また、スマート農業技術の活用により省力化を図るとともに環境に配慮した生産方式の導入を推進し、持続可能な生産体制を確立する。